

長野環境人

自然に優しく、暮らしを楽しむ

小林光さん対談企画

柳沢林業社長
原薫さんと語る

信州に澄んだ空気とおいしい水をもたら
し、人間が生きるために必要なものの多く
を与えてくれる存在。柳沢林業(松本市)
を営む原薫さん(51)はそれを「山である」
と言う。

多様な木々が混在する山の保水力によつ
て常に豊富な水が生み出され、災害が軽減
されるこの豊かな水が稲作をはじめとする
農業を可能にする。山の恵みは山村、農村
だけでなく、漁村にも繁栄をもたらす。豊
かな森林によつて山から川を経て海へと運
ばれたミネラルが豊かな海産物を育む。原
さんは「豊かな山があつて豊かな海がある
ことを漁師さんたちはよく知っている」と
語る。

そして、その自然との共生を「街中でも
つと図ってほしい。市街地にこそもっと緑
地を」と提案する。街は元々自然だった場



山の恵みを暮らしに。山の循環を街中
に。そんな「山」の本質的な価値を広め
る担い手としての林業を目指す原薫さん

街と自然との共
生の大切さ。そこ
に今、サーキュラ
ーエコノミー(循
環経済)の視点を
持った若者世代が
関心を向けてい
る。山から街に向
けて発信し続けて
きた原さんと柳沢
林業の皆さんの理
念が街に届き始
め、豊かな暮らしのヒントを山から学ぼう
とする流れが街に生まれつつある。そんな
若者、そしてその先を担う子どもたちに対
し、原さんは「もっと山の中で遊んでほし
い」と願っている。

(野村知秀)

7面に対談

人間がつくった不都合は人間が解決

長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

原 薫さん

対談

小林 光さん



小林 光さん 75

元環境省環境事務次官。東京大先端科学技術研究センター研究顧問。茅野市行政アドバイザー（環境分野）

水を育む山を整備

小林 山の仕事以外にも多様な事業を展開していますね。

原 民有林での仕事を中心に周囲の建物に被害を与えないように木を切る特殊伐採、まきの製造販売、木質内装・外構のデザイン施工などを行っています。指定管理でキャンプ場を運営し、米作りなどの農業や日本酒も造っています。エンドユーザーの暮らしとつながれる仕事は山での仕事とはまた違った面白みがあります。

小林 林業をどのように捉えていますか。

原 私たちは素材生産業です。山の所有者から立ち木を買わせてもらい、切り出して製材業者に売る仕事です。林業を一次産業と捉えるのであれば、それは山を所有する方が行う木材の生産事業と言えます。私たちは山の仕事をやりきれないという所有者さんに代わって山を整備する仕事ですからサ―ビス業に近いと考えています。今の林業はこうした素材生産業者が中心の担い手です。

小林 山の所有者が林業や山を活用した事業をするというのは少なくなってきたように感じていますか。

原 所有者さんの中には、山を持っていても活用する方法が思い浮かばないという方が少なくないと思います。私たちは「いのちの源」である山の再生を目的とした森林づくりを目指し、その役割を果たす担い手、いわば地域の「山守」でありたいと考えています。地域の材を適切に利用することは持続可能な山づくりにとって大事なことです。



原 薫さん 51

柳沢林業社長

地域の「山守」でありたい

はいますが、私はそうではないと思います。人間がつくった不都合は、人間が解決しなければなりません。小林 林業が経済的に成り立たない山もたくさんあります。そうした山の価値をどうしたら生かせますか。

原 木材だけでなく、環境林として維持すること自体に対する価値が社会に浸透するのを感じています。山の所有者が森林に手を入れて守ることに対価が支払われるような仕組みがあるといいですね。

陸域・海域の30%保護

小林 山を整備し、環境を守る



「地域の山守としての役割を担いたい」と語る原薫さんと小林光さん＝1月20日、松本市内

循環経済の視点広がる

小林 山から街にどんなメッセージを送りますか。

原 松本市は中心部に都市があり、周囲に豊かな森林が広がっています。松本に限りますが、地方都市で意外と街中に緑がないと感じませんか。私は街にこそ自然との共生を図ってほしいです。小林 同感です。街の人たちの受け取り方はいかがですか。

原 長年、伝え続けてもなかなか届きませんでしたが、5年ほど前から若い人たちの間にサーキュラーエコノミー（循環経済）の視点が広がり始めたと感じています。街の皆さんの方から実践方法を知りたいと山を訪れてくれるようになりました。

小林 興味深い動きですね。

ことが企業の収益を高める制度が始まっています。世界の陸域・海域の30%の保護を目指す「30 by 30（サティファイバイサティファイ）」はその一つです。保護地域の拡張と管理の質の向上を目指すもので、国立公園など以外でも生物多様性保全に資する地域（OECM）を設定し、管理していくということ

です。民有地でもOECMに設定でき、環境省は「自然共生サイト」として認定する制度を始めました。この取り組みに賛同する企業が資金を出して保全活動を支援します。企業が支援対象先として「自然共生サイト」を探し求める動きになってほしいと期待しています。

原 一例ですが、松本城の入り口にあえて腐ることを前提にしたオブジェを置きました。木は腐りやがて土になるということを大事にしたものです。そんな当たり前のことをこれからのグリーンインフラの象徴にしたいと思いました。街は元々自然だった場所に造られたのですから、自然の摂理に合う街に近づけていく方が理にかなっています。適度な緑地が街には必要です。

小林 緑地の量に加え、質も大事だと思います。都内ではそうした質の高い緑地ができています。例えば「大手町の森」千葉県の房総半島で植え、育てた多種多様な植物を大手町に移し、都心に雑木林の空間が造られました。そこに価値を感じた外資系ホテルが参入。雑木林に面したレストラン

子ども、若者にリアルな自然体験を



稲作・農業に取り組むことで山が育む「水」の大切さを実感する柳沢林業の皆さん（同社提供）

原 軍士見町では人工林で成熟期を迎えた樹木を皆伐し、再造林する計画がありますが、計画地の近くに住民からは水源涵養などの機能が失われるのではないかと懸念もあるようです。きれいな水を供給する山はすべての命の源といってもいいと思います。そうした山をさまざまな制度で支え、環境を守ることが収益につながるというのは、山の所有者にとっても良い話ですね。

小林 里に暮らす我々にとっても水は大変重要ですね。

原 海の漁師さんも山をとて大事に考え、山の神に感謝する祭りを大切に続けています。豊かな山があつて豊かな海があることをよく知っています。

小林 原社長はなぜこの仕事を選んだのですか。

原 「木を読む」という本が理由の一つです。ここに登場する最後の江戸木挽き職人の林以一さんの言葉が心に残っています。「天寿を全うする少し前の木を切り捨てもらい材木として用立てる。木は生きています。血も声も出ませんが、命があるのです。伐採とは命をいたかく行為。いただいた命は生かきられなければいけません。

原 これからのまちづくりの参考にしたいですね。

小林 山に関心を持つ若い世代とかかわってみたい経験から、これからのまちづくりに必要なことは何でしょうか。

原 環境と経済が対立構造の中で語られる時代もありました。しかし、今の若い人たちの視点は違います。その変化は街をもっと良くしていくような気がします。ただ若い人たちにはリアルな自然体験が不足しています。私たちが以前から大切にしている子どもたちの自然体験学習に一層力を入れていきます。子どもたちにはもっともつと山の中で遊んでほしいですね。